

講 師 秦 正徳

演 題 「富山に新たな建築文化は作れるか」



略歴

1947 年京都市生まれ。1972 年京都府立大学卒業、広島県立工芸試験場研究員・高岡短期大学産業デザイン学科教授を経て、現在富山大学芸術文化学部教授及び同学部長。

富山県在住 25 年。

専門は木質構造学(木造建築物の構造設計)、「半剛接を有する木構造の解析に関する研究」で京都大学農学博士。日本建築学会、日本木材学会などの各会員・役員。

主な著書に「木材と科学(共著・海青社)」「木材の科学と利用技術(共著・日本木材学会)」など。

8 年前に富山大学に建築コースを設立した時に皆さんに
応援いただき陳情書に印をもらい文科省や国交省に提出
したことで、うまくいった。

この場を借りてお礼を申し上げます。

今年、3 回目の卒業生を出した。一学年 20 名なので、合
わせて 60 人の卒業生を送り出したことになる。

また、昨年から大学院を作った。地域によりやく大学から
の恩返しができることになった。

ありがとうございました。

新たな建築文化を作れるかとのテーマですが、今日は 2
つの話をします。1 つは、全国の国立大学で芸術文化学部
という名前の学部はたぶん 1 つだけ。



(Graduate School of Art and Design Faculty of Art and
Design UNIVERSITY OF TOYAMA)

尾道に市立の大学で芸術文化学部があるようだが、文学系の
ようだ。

富山大学は物作り。

外国に行くと、建築や街はきれい。うらやましいと思うが、
実は日本ほど美しいところはないのではないかと。

今まで経済成長の流れの中で失われたものを取り戻す。

津波があつて、自然には人間は勝てない。

生活を美しいもので埋め尽くすということでもさらに美しい国
を作ることが芸術文化学部の目指すところ。

「環境は人が創り、環境は人を創る」と言われている
ように、美しい環境に生活する人は美しい心を持つもの
だ。我が国は美しい。四季のある自然が美しいのである。
この自然とよい関係を維持して生活していたのだが、こ
の関係が経済優先とともに崩れようとしている。結果と
して人々の生活は便利になったが、環境は悪化した。世
界標準で大量生産による経済活動は見直される時代にな
ったのだ。猥雑な生活環境が地方にも浸透してしまっ
た。我が国の工業製品も価格だけでは競争に勝てない時
代となっている。ここにおいて芸術への関心が高まって
いる。我が国の地域文化である

日本の再構築を。富山は四季がはっきりしていて、その可
能性の高いところ。住まいに関してもすばらしい遺産がある。

心豊かで、健やかな暮らしをするには芸術が必要。

芸術のスパイスをふりかけるのが良いのではと思う。

日本学術会議の一文の中で良いことをいっていた。

モディファイ

芸術の持つ意義

古今東西の芸術作品を鑑賞し、またその創造過程を体験することは、日常生活からくる固定観念を打破し、新しい新鮮な発想や着眼点を身に付けさせる効果が期待できる。古来、旅や読書と並んで各種芸術の創作や鑑賞、身体活動が奨励されてきた所以である。また、芸術に触れることは、精神の均衡を保ち、挫折や苦難に乗り越える精神の強度を育てるためにも必要な習慣である。ここに芸術が本来持つ力があるといえよう。 _
大学教育の分野別質保証のあり方について:日本学術会議 _

多様の統一という言葉があった。

絆という言葉もあるが、さまざま形と形態を認め合って折り合いをつける。

それは町並みでも物でも。気持ちよく。

そのためには自分を知る、そして相手を知ることが必要なのだろう。

芸術文化の発展は 多様の統一を実現し もの作りと芸術性を結びつける _

様々な文化を認め合い協調 _
スティーブ・ジョブズの偉業 _
感動を生活のなかへ _
社会の創造性を高める _

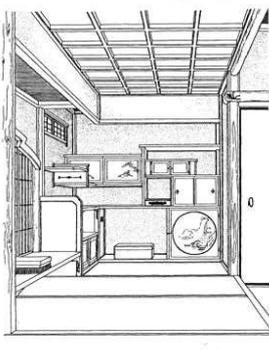
二つ目として、アップルのスティーブジョブズのめざしたところが参考になる。

アップルコンピュータは官能的な喜びがある。

世の中に感動で満ちあふれるものを作っておいたらよいなことをしない。

形態に直接結びつくもの

多様性の統一の例では桂離宮の美しさもある。



桂離宮。変化のあるプラットフォームを築く経緯である。
図4-5 桂離宮車輪上段の案内経路



バスの中にも多様性があるが、統一感はありません。

これはウィーンの集合住宅。



これも多様な要素があるが、結構統一感が感じられると思った。時間がかかるのかもしれない。

これはつい最近のバンコクの写真



統一感はあるのでしょうか？エネルギーは感じられる。私たちが少し前に発揮したものがここにはある。

これはヘルシンキの写真



どっちがいいだろうか？私はバンコクも良いと思う。

ヘルシンキから日本に戻ってきて

上野の猥雑さの中に入ると、ほっとする。



日本人の感性には、東南アジアの暖かい国の記憶が残っているのかも。

これは毎日通る呉羽駅の夕暮れ。



これも悪くない。夕暮れに家に向かって駅を下りる時の黄昏の雰囲気がい。

二つ目の話題



富山の木造住宅の構造の特徴

- ・骨太の柱で雪の重さに耐える。
- ・木材の繊維を切断することのないように木材を丸太のまま利用している。
- ・たわみにくい鴨居の断面と雪荷重の合理的な配分で襖や障子の開閉に不都合がでにくい。
- ・中央に配した強固なコア（枠の内）を起点とした自由度の高いプランが広がる。

100年住まっている家、後ろに杉の林があり、この木を使ってこの家を建てている。これは象徴的な写真
これを取り壊すことになり、壊すにあたって好きなようにして下さいと言われ、手壊しで解体した。

木材は繊維の束で立っている。繊維を切ったらもう力がでない。丸太をそのまま使うのが一番構造的に強い。これが大工の技術。

良く考えてみると瑞泉寺も勝興寺も東本願寺も荷重を支えるのは皆丸太にしている。直線を出すのに丸太の上に束を置いている。これが伝統の技術。富山ではそれが普通の住宅にも使われている。これはすごいこと。



増築されたところの登り梁が全部杉。あまり杉を横架材に使わないと思っていたが、この住宅では使われている。合掌を作って小屋を構成している。

後で増築した部分は今の大工が製材した通直な部材を使っている。曲がった丸太をまっすぐに製材すると繊維が切れて弱くなる。木材の持っている強さをそのまま生かす技術・技がここにある。

この写真も丸太を組み合わせ、その上に沢山の束を立て屋根の直線を出している。



枠の内という構造のコアをまず建てて、それに取り付くように作っている。

このような技が富山にはまだある。

補修もできる。材料と技の連携が丸太に見られる。

その材料は山に杉を植えておいて、お大きくなったらそれを使う。増築などで伐採したらその後植林する。

自然と、住まい方と技が一体になっている。

これは文化だと思う。

サステナブルの具現

柱脚や土台を取り替えるなど補修しつつ長期耐用している。和室1, 2の周りでは、柱脚と土台が腐朽したため、土台を取り去って独立基礎にしている。

柱はもとより、横架材（注目すべきは登り梁）にも使うなど、すべての部材を持ち山のスギでまかなっている。建築当初に持ち山のスギを伐採した後、補植している。築70年後の改築の際もこの山からスギを切り出した。今回の建て替えにも同じ山の樹齢100年から180年のスギを用いる。

富山の木造文化は、気候、風土（鉛直荷重が大きい。）という条件を満たす構造を考えた匠みが居て、山に木を植えると再生産されてぐるぐる回る。

若い頃木材の接合を研究していた。木造は接合が緩む。それを解析していた。富山に来て勉強させてもらって、これは木造文化として存在していると思った。木材利用にある種の理念がある。かくあらねばならないという全部がその理念を中心にふるまっている。

住まい手もそう。自分の家を作ったら、自分のゆかりの山に木を植えている。それがこの地に根ざしている文化だ。建築全体にまで論述できないが、木造に関してはこのようなパターンがある。木材利用の理念。それが文化となっている。水と太陽と炭酸ガスの循環。

建築文化というのは難しいことばだが、かくあらねばならないという何らかの理念を持っているということが文化につながるのではないか。

これが、二つ目の言いたかったこと。

①芸術のスパイスと②木材利用の理念が情報交換会に役立てることができるありがたい。

